

歳を重ねても、障がいがあっても おしゃれを楽しんでほしい。

腕が上がらなくて、おしゃれな服が着られない……。車いす利用者もかっよくジーンズを履きたい……。高齢や障がいなどで衣服の着脱が困難になった人たちのこうした思いに応え、衣服の提案や製作・リフォームを行っているのが、金城学院ファッション工房。相談会やファッションショー、講演会など、さまざまな活動を通して障がいのある方の衣服支援を続けています。そこで、工房の代表を務める平林由果先生と、学生メンバーの高須衣玖さん、角田萌々子さんに話を聞きました。

おしゃれには人を元気にする力がある

金城学院ファッション工房のきっかけは、2004年、学生が「障がい者の衣服支援」を卒論のテーマにしたこと。それを機に2006年、2007年と続けて障がい者をモデルにしたファッションショーを担当し、モデルたちがドレスを着て目を輝かせたり、気持ちが前向きになるのを見て、衣服の力を実感。同時に衣服支援の必要性も感じ、2009年、学内に工房を開設しました。現在は卒業生が中心となって縫製を担当。環境デザイン学科などの学生も参加して、衣服の製作やリフォームを請け負っています。重視するのは、無理なく着脱できる、動きやすく着心地がよい。優れたデザイン性も大切な要素です。障がいの程度は一人ひとり違うので、まずは利用者と話し合った上で製作に着手。創意工夫をしながら製作、試着、修正の繰り返しで、完成までにはかなりの時間を要します。「それができるのも、スタッフのボランティア精神に支えられているから。私ひとりでは何もできません」と平林先生は言います。

障がい児のためのユニフォームを製作

コロナ禍でほとんど活動ができなかった2020年秋、ある医療法人から、医療型短期入所施設に入所する子ども(0～6歳)のユニフォームのデザイン・製作を依頼されました。重度の心身障がい児や医療的ケアを必要とする子どもなので、要望も「胃ろうや気管切開の処置のしやすい構造で、スポーティーでおしゃれなデザイン」という難易度の高いもの。学生メンバーが中心となって製作を始め、何度も試作を繰り返して、ようやくTシャツとパンツ、ロンパースが完成しました。時節柄、医療法人やメンバー同士のやりとりは全てオンラインで。「デザインはもちろん、布選びからボタンの位置や大きさまで、試行錯誤



写真左から、角田萌々子さん(環境デザイン学科4年) 平林 由果先生(生活環境学部 環境デザイン学科 教授) 高須衣玖さん(人間生活学研究所 消費者科学専攻 大学院2年) 角田さんと高須さんが付けている可愛いエプロンはファッション工房のオリジナル。上肢の動きが制限された人でも簡単に着脱できます。

の連続。それだけに達成感も大きかった」と、高須さん。角田さんも、「幸い12月のクリスマス会に間に合うようにお届けすることができ、子どもたちも喜んでくれたとのこと。それを聞いて本当に嬉しかったです」と言います。

「みんなで一緒に服を着たい！」に応じて完成したユニフォーム。前開きで着脱しやすく、脇に縫い目がないので着心地も抜群。この活動は優れた課外活動に対して贈られる「学生部長賞」を受賞しました。



Fashion for allをめざして、これからも

コロナが少し落ち着きを見せ、控えていた活動も徐々に再開されるようになった今、学生代表を務める角田さんは言います。「今の1～2年生はほとんど活動ができなかったのが実情。相談会やファッションショーなどのチャンスがあればぜひ参加して、いろんなことを経験してほしい」。モノづくりが楽しくて、院生になった今も工房の活動に参加する高須さんも、「大学の学びだけでは、障がい者や高齢者、子どもの服づくりは経験できず、学ぶことが多かった。何より人のために服をつくるという喜びが大きかった」と振り返ります。「何歳になっても障がいがあっても、おしゃれをしたいという心は変わりません。この工房が、誰もが気軽に遊びに来て相談できるサロンになれば嬉しい」と、平林先生。Fashion for all(すべての人がファッションを楽しめる)の実現をめざして、工房のおしゃれ支援はこれからも続きます。



2019年度金城祭のファッションショー後の集合写真。モデルさんと学生たちの笑顔が素敵です。



「自分で織った布をあしらったドレスがほしい」という要望に応えて製作したドレス。メイクも学生が行います。



『愛され、育ちあう。』をモットーに 歩み続けて50年、そして未来へ。

今年、幼稚園は創立50周年を迎えました。時代が様々に変わりゆくなかでも、スクールモットー『愛され、育ちあう。』は変わらずに保育が行われてきました。

年度当初、年少の子どもたちとどう関わろうか、と迷っている様子を見せた年長・年中の子どもたちも、1ヶ月近くが過ぎる頃には積極的に話しかけ、時には気遣う姿も見られます。「タオルかけられないの？ やってあげる」と困っている姿に気づくこともあれば、制作遊びのために置いてある素材や道具の使い方を教えていることもあります。また年上児の遊びに興味を持って加わった年少の子どもたちに「壊さないようにね、気をつけてよ」とヒヤヒヤしながら遊んでいることも。只一つ大きくなったことを喜んでいたり子どもたちが、年下の子どもたちと出会い、関わり合うなかで慕われ、頼られ、時には我慢することも経験しています。年少の子どもたちはというと、年長・年中の子どもたちが、かつて経験したように守られる安心感を得て、愛される喜びを感じています。こうした互いに関わり合って育つ子どもたち一人ひとりの姿から、どのような共感体験を通して関係を築き、つながり合っていくのか、これからが楽しみになります。

こんな時代だからこそ つながって～今、わたしを生きる

同時に、保護者の『父母の会』や有志による会の活動も始まりました。コロナ禍で今までと同じ形では行えないこともありますが、今までの経験をもとに楽しくつながり合える『父母の会』を創っていこうと委員の方々がアイデアを出し合い、発信してくださっています。

この何年か、一人ひとりがつながりにくい環境にあり、子育てに孤独を感じた時もあったと想像します。一人ひとりが抱える子育て不安は違いますが、互いに理解し、支え合える存在はどれほど励みになるでしょう。

私たちの幼稚園が加盟しているキリスト教保育連盟では毎年、年主題が出されます。この年主題は目標とするものではなく、キリスト教保育をする一人ひとりに力と導きをいただくものとして、神様から与えられたものと考えられています。その年主題が、今年度は『つながって～今、わたしを生きる』です。様々な理由で関わりが持ちにくいこの時代、人と人とのつながりの大切さをひしひしと感じます。また幼少期に愛される経験を重ねることで育つ心の豊かさが、一人ひとりのこれからの生きる力になっていくと。

子どもたちとも、保護者とも丁寧に向き合い、祈りの中で豊かな『つながり』を個々に築いていく1年でありますように。『愛され育ちあう。』を心にとめて、保育にあたっていきたくと思います。



年齢の違う子どもたちと関わり合うなかで、少しずつ、子どもたちの信頼関係が育まれていきます。



50th
Anniversary
愛され、
育ちあう。



じょうずに
おかたづけ、
できたね。



ほらね、こうやると
きれいにおれるよ。

2021年度WWL生徒研究発表会で 本校生徒が課題研究を発表しました。

さる3月6日(日)、名古屋大学野依記念学術交流館にて、名古屋大学教育学部附属中・高等学校 コンソーシアムTOKAI主催による「2021年度WWL生徒研究発表会」が開催されました。この日はWWL事業拠点校である名古屋大学教育学部附属高等学校はじめ東海3県の事業連携校6校の生徒が集い、日頃の探究活動の成果を発表。本校からは2名の生徒が参加し、課題研究のポスター発表を行いました。高校と大学が連携し、生徒たちの課題研究を支援し評価することで、それぞれの研究を進展させることができたことはもとより、他校の生徒の研究発表を聞いたり、意見交換をする中で、新しい知見や研究手法を学び取ることができるなど、大きな収穫を得た発表会となりました。

WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)とは、2019年度から始まった文部科学省の取り組みで、将来、世界で活躍できるイノベティブなグローバル人材を育成する事業のこと。



貴重な機会を今後の探究活動に活かしたい

参加者の声

発表タイトル「ナスの褐変についての考察」

「ナスの褐変」について研究しようと思ったのは、ナスの漬物を食べたとき、ナスの実に変色が生じていることに気づき、また、その変色具合にも特徴があるように感じ、調べてみようと思ったことがきっかけです。

発表の準備では、考察を深める過程が楽しく、時には夢中になることもありました。先生方には発表の論理展開や観察結果の評価の仕方、ポスター発表での情報のまとめ方など、懇切丁寧なアドバイスを頂きました。私ひとりでは気づくことのできなかつた点もたくさんあり、とても感謝しています。

発表会当日は、会場の雰囲気も温かさも手伝ってリラックスでき、発表や意見交換を楽しむことができました。審査員の先生方からは研究や発表についての指摘やアドバイスもたくさん頂き、今後に活かしていきたいと考えています。特に考察の内容についてのアドバイスは印象深く、私にとっては新しい視点でした。また、欲しいデータなどを得るためには実験等を上手に組み立てることが大事なのですが、その難しさも感じ、もっと力を磨いていきたい、意欲が湧いてきました。他校の生徒の発表では、実験方法などに工夫のある研究や難しいテーマを考察している研究、社会問題と向き合っている研究など、たくさんの素敵な研究があり、大変魅力的でした。

振り返れば、WWLの研究発表では、研究の方法やまとめ方など自分の改善点も含め、本当にたくさんのお話を学ばせて頂き、感謝の気持ちでいっぱいです。これからも意欲的に様々なことを学び、いろんなことに挑戦していきたいと思っています。

現3年 小林 万莉



発表タイトル 「情報の与え方による ワクチン接種意欲の変化」

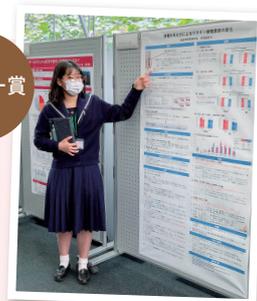
ポスター賞
受賞

「子宮頸がんワクチンの積極的勧奨中止の背景に、情報の伝え方が大きな影響を与えた」ということを知り、「与えられる情報によってワクチンの接種意欲がどのように影響されるのか」という疑問を持ったことがこの研究に取り組んだきっかけです。

発表の準備では、アンケートの回答を分析する際に、仮説通りであった部分だけでなく、そうでなかった部分からも考察し、新たな発見をする過程が一番楽しかったです。アンケートの質問内容の設定や考察の仕方などには苦労しましたが、複数の先生方からアドバイスを頂き、発表することができました。

本番では、審査員の先生方からのコメントや質問がとても興味深く、自分が調べてきたことを客観的な視点で見つめ直すこともできました。今回の発表をどのように応用するかという点でもアドバイスを頂いたため、それらを基にさらに深く考察していきたいと考えています。他校の発表では、身近な疑問から研究を進めている人からハイレベルな研究まで幅広いテーマの発表を聞くことができ、多くの刺激を受けました。特別な機械や器具がなくても身近にあるものを活用し、結果を出しているグループも印象に残りました。今回の研究発表を通して、どのような結果に対しても、その考察がとても重要であること、また、その過程で論理性を持つことの大切さも学びました。他校の生徒の発表を聞くことで、複数の文献を引用するべきだったという課題も見えてきました。今後は研究をさらに深めるとともに類似研究も調べ、卒業小論文の作成に向けて取り組みたいと思っています。

現3年 早稲田 彩乃



2021年度卒業生進路状況

今年度の金城学院大学への進学者数は、高大接続型推薦者155名に一般推薦・受験での進学者27名を加えて計182名(卒業生全体の55%)でした。高大接続型推薦では多くの生徒が第一希望の学科に進学することができました。また、「協定校推薦制度」を利用し、

関西学院大学へ7名、同志社女子大学へ5名の生徒が進学をしていきました。

外部受験では国公立大学合格者が名古屋大学1名、岐阜大学1名、三重大学1名、名古屋市立大学(薬学部)3名など合計8名となりました。私立大学へも、早稲田大学1名、慶應義塾大学3名、上智大学



Advanced English Seminarで 英語力をもっと伸ばそう。

金城学院中学校では、2021年4月より「Advanced English Seminar」の授業がスタートしました。本校が2021年度より英語利用入試(帰国子女もしくは英検準2級以上相当の資格所有者などが対象)を導入したことで、生徒たちが身につけた英語力を維持させ、さらに伸ばしていくことを目的に開設。週に1回、放課後を使い、ネイティブ教員によるオールイングリッシュの授業を行っています。

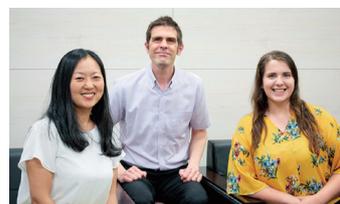
Advanced English Seminarでは、習熟度別に2つのクラスを設けています。そのひとつ、オークイン先生のクラスでは、まず最初に教材のビデオを見せ、それをテーマに先生が生徒に質問したり、グループで話し合ったり、レポートを書いたり。生徒が書いた文章は文法やスペルのチェックをし、添削した上で翌週に返却。英語で「話す」「書く」といったアウトプット力を鍛える授業を中心に行っています。一方、ネイティブレベルの生徒もいるパウカー先生のクラスでは、身近な話題から社会問題まで様々なテーマを設け、グループで議論したり、自分の考えを書いて発表したり。時にはグループ同士によるディベートを行って、英語で考え、議論する力を育てていきます。たとえばある日のテーマは「都市の生活と田舎の生活のどちらがいいか」、またある日のテーマは「少しの食物とナイフで、



グループに分かれて話し合うパウカー先生の授業の様子。

無人島でいかにサバイバルするか」。テーマを巡って、生徒たちは熱い闘いを繰り広げます。

授業で心がけていることは、「正しい発音や文法を教えることはもちろん大事ですが、それよりも言語の背景にある文化や考え方、価値観を受け入れ、理解した上で表現する力を育てたい(パウカー先生)」。オークイン先生は、「せっかく力があるのに、シャイでなかなか発言しない生徒が多い。そんな生徒には、間違ってもいいから、まずは話すことで自信を持たせること。生徒たちの中に少しずつ変化が見られ、1年後がとても楽しみ」と言います。チームで支え合い、協力しあうことで、互いの英語力をさらに伸ばしていく空気が生まれてきたことも、この授業がもたらした相乗効果。個性豊かなネイティブ教員とプログラムで、生徒たちは、英語力もチーム力も着実に身につけていきます。



写真左から
担当教員の服部契子先生、
ネイティブ教員の
BOWKER, Daniel A先生、
O' QUINN, Caitlin R先生

中学1年生で
英検1級合格!

英語を使って、どんどん自分の世界を広げたい!

私は6歳から11歳までアメリカに住み、日常的に英語を話していました。でも日本では、Advanced English Seminarだけが唯一、英語だけで思いきり話ができる時間。同年代の子たちといろんな話ができ、すごく楽しいです。中学1年生の時には英検にも挑戦。準1級、1級に合格しましたが、この授業がとても有益でした。というのも、私は面接が苦手な緊張してしまうのですが、ネイティブの先生と話をすることでそれもなく、本番では落ち着いて臨めました。受験に際しては、原書を読んだり、海外のニュースを見て、時事問題や国際情勢を学び理解することにも努めました。英検1級を手にしても、それはゴールではなく、そこから英語を使って自分の世界を広げていくこと、経験をどんどん増やしていくことが大切だと思っています。

2年 松本 知未



4名、青山学院大学5名、立教大学8名、南山大学40名、同志社大学12名などの合格者をだすことができました。また、医学部医学科の合格者は現役・浪人あわせてのべ5名でした。卒業生の今後のご活躍をお祈りしています。

(進学者数)

国公立大	私立大	金城学院大学	国公立短期大学	私立短期大学	専修・専門学校	就職	進学準備	その他 (海外留学など)	卒業生総数
8	112	182	0	2	3	0	23	0	330